

シンポジウムを振り返って

保坂達雄

今回のシンポジウムの準備段階から関わった例会委員の一人として、また総括討論の司会を担当した者として、このシンポジウムの全体を振り返ってみたい。

一昨年の九月だったか、一年後に控えた五百回目の例会を記念して何かシンポジウムのようなものができないかという案が持ち上がった。古代文学会はこれまで月例会と夏季セミナーの二本立てで活動してきた。昭和三十五年一月発足以来これまで歩んできた四十二年間の歴史を振り返り、二十一世紀に向けて新たな第一歩を踏み出す絶好の機会として位置づけられないだろうか。企画運営を任されたわれわれ例会委員は例会五百回記念シンポジウムをどのようなものにすべきか検討することになった。

まずテーマについて協議した。念頭に置いたのは、この機会に学会を広く多くの人に知ってもらうためにできる限り外部に向けて開いてゆき、活動を内外に強くアピールすること。次に古代文学という狭い領域に留まらず新世紀に向けて隣接する他分野や別の専門領域の人々とも専門の枠を越えて交流を積極的に図ってゆくこと、この二点が確認された。

今日文学研究は文学部の危機的状況とともに改めてその意味が問われている。いま国文学に携わるものとしてわれわれがし

なければならぬのは一体何なのか。われわれの文学研究は一体どこに向かってゆけばよいのだろうか。古代文学会はこれまでも他分野との交流を積極的に行ってきたが、今後は一層こうした交流や連携を深めることが新時代の文学研究の課題ではないか。またこのイベントを通して多くの新入会員に参加してもらって学会に清新な風を吹き込んでもらおうとも考えたのである。

そこで、ここ数年の古代文学会の活動を検証してみると、大きく二つに集約できるのではないかと考えた。即ちフィールドとテキストの問題である。近年中国少数民族の歌垣のフィールド調査から日本本土古代の歌の生態が問い直されてきている。テキストの問題としては日本紀講読の現場論的な解説によって歴史叙述の生成が明らかにされつつある。この二つの方法論を見てわかるように、今日の古代文学研究はすでにこれまでの原典第一主義的な研究を遙かに越えたところに来てしまっている。こうした研究状況を踏まえて、第一部には「歌の生成と生態」と題して古代の歌を取り上げその生成をフィールドの面から、第二部はテキストの注釈行為を通して歴史叙述の生成を探る「歴史叙述と注釈」をテーマとし、二十一世紀の古代文学研究を模索するシンポジウムとした。

発表者にはそれぞれのテーマに対して学会と学会外から一人ずつお願いすることにした。第一部には琉球弧の歌掛き文化を追究している民族音楽学の酒井正子氏と学会からは中国少数民族の調査を続けている岡部隆志氏に、第二部には中世日本紀の研究を切り開いてこられた阿部泰郎氏と学会からは日本紀注釈を現場論的に研究している津田博幸氏にお願いすることにした。これら四人の方々にはそれぞれの専門領域を越えて互いどのように交流しえるのか、このシンポジウムを通して新たな地平を提示していただくと考えたのである。これら第一部第二部を踏まえ、第三部を総括討論の場とし多年学会活動の中心として活躍してきた森朝男氏と古橋信孝氏に新世紀の古代文学研究はどうあるべきか提示してもらおうとした。

当日は一一七名(会員六五名、一般五二名)という予想以上の参加者に恵まれ、終日熱気の籠もった記念大会となった。フィールドとテキストの両面を通して古代の言語表現がどのような仕組みのもとに生成されてくるのか、その実態を解明しようと思図した企画にそれぞれの発表者がみごとに呼応してくださった結果であろう。

このシンポジウムで、フィールドとテキストまた口誦と文字という違いを越えて生成の動態が明らかにされたことが今回の最大の収穫だったのではないだろうか。もちろんこれまでにも古代文学会は一貫して表現の問題に拘って来たが、この大会で表現の動態に焦点を合わせたことで、可変性と流動性に富んだ生成段階のダイナミックな動きがある程度解明されたことから古代研究の新しい視界が開けて来たと言えるのではなからう

か。例えば酒井氏は口誦段階の歌がさまざまな場を循環してジャンル形成に働きかけていることを明らかにした。また岡部氏は歌の場が付帯するさまざまな条件によって自由自在に伸縮することを指摘された。一方阿部氏は聖徳太子の伝説を例にテキストの増幅性を指摘され、津田氏も日本紀講の場から創出される神学テキストとしての日本書紀という考え方を提示した。

このような第一部第二部のシンポジウムを通して、われわれは古代の言語表現が現代の表現認識とはまったく異なる論理で複雑に生成されていたことを教えられたのである。即ちテキストに定着されるまでの過程でさまざまな旅を重ね、定着後もさらなる旅をし続けている流動体であることを念頭に置かなければ古代表現の実態に向き合ったことにならない。改めて古代表現の重要な鍵を獲得したように思うのである。

総括討論では、森氏は酒井氏に対して供養歌と哀惜歌は繋がっているのかと質問を投げかけ、また津田氏には日本紀講にも中世と平安期とでは微妙な相違があるのではないかと疑問を投げかけた。古橋氏は生成してゆくものを見てゆく点に第一部第二部の共通点があったと全体的な感想を述べ、いろいろなものを含みながら展開してゆくのが生成ではないかと指摘した。この他岡部氏を取り上げた歌の持続の問題における音楽と言葉の関係、阿部・津田両氏には歴史叙述と宗教、また権力の問題など、少ない時間ながら活発に討論が行われた。

「古代文学研究の新世紀へ」と銘打ったこの大会は、発表者参加者の溢れる熱意の中、未来の研究への地平が見えてきた大会であったと思う。皆様のご協力に厚く感謝したい。